
蘭姫 マユヒメ

文樹妃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

繭姫 マユヒメ

【Nコード】

N2413E

【作者名】

文樹妃

【あらすじ】

廊下ですれ違っただけの彼女、なぜか気になるその子は、いつもぼんやりと遠くを見るような顔をしていて 偶然話し始めてからその理由がわかることになった。彼女は、休学していた一年弱の間、夢を見ていて、その世界が実在する異世界だと信じていたのだ。幸せな夢から目覚めた、この現実を憎んでいる彼女。そんな彼女のそばにいなながら、どうすることもできない俺。夢の世界に帰りたいと願う彼女だけれど。現実と夢の境界線が、ふと淡くゆらぐような、そんな不思議なストーリー。（この作品は、エンキドさま主催

の小説大会参加作品です)

(前書き)

この作品は、エンキドさま主催の小説大会に参加した作品です。

春 全ての始まりの季節に、俺は彼女と出会った。
いや、出会ったといっても、廊下ですれ違ったというだけだが。
それでも俺にとって、あの瞬間が、彼女と出会った始まりの時であり、俺の人生で初めての、不思議な出来事との遭遇の瞬間だったのかもしれない。

何かに惹かれるように、ふと目にした、彼女の一瞬の横顔、そして、なびいた黒く、艶のある長い髪が、俺の心に焼き付いて、離れなくなつたのだった。

「おつす、佐倉！ 佐倉つてばよ、おゝい、サトミちゃん？」

朝っぱらからふざけた声でそう呼ばれて、思いつきり顔をしかめて、俺は振り返った。

「その呼び方はやめろつて言っただろ、清水」

清水 純也 入学式で後ろに並んでから、既に今では悪友と化した男は、にやにやと俺の見ていた方角に目をやる。

「おいおい、また見てんのか？ まあ、確かに外見最高だからなあ、あの子。でも、やめといた方がいいって、お前も知ってんだろ？」

ちょうど俺たちの教室の前を、通り過ぎていった長い髪の後姿を目で追って、俺は清水の肩を押しやった。

「別にそんなんじゃないよ」

ぶつきらぼうな俺の返答に、清水はまだあきらめきれないように、にやついている。

そんな俺たちの間に割って入ったのは、ショートヘアの活発な女

宮野 香織だった。

「おつはよ！ 里実くん」

にこやかにそう言っ、俺の隣の席に腰掛けた香織に、清水は唇をとがらせた。

「なんだよ俺には挨拶ないの？ いつも冷たいんだから香織ちゃん」

まんざら冗談でもなさそうに、そうぼやく清水に笑って、香織はノートや教科書を出していく。

「顔のいい男子にしか、挨拶はしないことにしてんの。ねえ、里実くん？」

「何言ってんだ」

冷たく答えた俺を清水がうらめしげに睨んでくる。

「くそくこいつ、顔だけはいいからなあ。早くも一年の注目ランキングに入ってるらしいじゃん？ あゝあ、うらやましい。」

それなのに、もつたいないよなあ。こいつ、全くそういうのに興味ないんだから」

別にそう言う清水だって、悪くはない方だと思うが、俺は全く自分の顔なんて、どうでもよかった。

笑って流した俺を見ていた香織が、清水に向かって人差し指を立てながら、口を開いた。

「そういうところが、モテる秘訣なんじゃない。ガツガツしてる、あんたみたいなのは、暑苦しくて嫌がられるわよ？」

またしても清水がショツクを受けている。けれど、そんな光景はすぐに薄れていくほど、俺にとってはどうでもいいものだった。

なんといつても、今俺の胸を占めているのは、彼女なのだ。まさに寝ても覚めても、というぐらいの勢いで、心の中に現れる、不思議な少女。

その評判が外見とは裏腹に、とてつもなく悪いことは知っている。悪いというか、敬遠されているとでもいうべきか。

いつ見ても一人で、どこか遠くを見つめているかのような、ぼんやりした顔をしている彼女。

彼女の抱える物が何なのか、何を思っているのか、俺は気になつてたまらなかつた。なぜ、いつもそこにいながら、存在していないかのような、不思議な透明感を持っているのか。知りたくてたまらなかつた。それでも、彼女に近づくどころか、遠くから時々目にするのが精一杯で、残念に思いながらも、そんな日々も悪くないとさえ、俺は思っていた。

けれど　俺にとっては予想外の、突然の展開が待っていることを、俺は想像もできずにいたのだ。その日までは　。

桜もほとんど落ちてしまった、ある日の放課後、クラブにも入っていない俺は、バイトも休みで、暇な夕方　たまたま、本当に偶然入った図書館で、彼女を見かけた。それも、突然降ってきた雨が原因という、まったくもって、図書館愛好派の皆さんには申し訳ない理由だった。

勉強や読書にいそしむ人々を避けて、なんとなく見ていた、人の少ない棚の前。

見慣れた長い黒髪が目に入って、俺はかなり動揺した。だって、こんな近距離で見るのも初めてだったし、予想もしていなかったから。

俺のそんな事情など知りもしない彼女は、目の前の本棚を、見るともなく、ぼんやり見ていた。

その棚に並ぶのは　夢判断、夢と深層心理、夢と心理学などといったタイトルのものばかり。それで、思わず話しかけていた。

「夢に、興味でもあるの？」

話しかけたというより、考えたことが、思わず口に出てしまったというのが近かつた。自分でも驚いたけれど、それよりももっと驚いた顔をしたのは、彼女のほうだった。

弾かれたように振り返って、俺を、何か信じられないものでも見

るかのような目つきで、凝視していた。その目を、見知らぬ人物に話しかけられた驚きによるものかと思つた俺は、あわてて謝つた。

「あ、ごめん。いきなり話しかけて、驚かせたかな……その、俺も同じ、藤坂高の一年生だけだ」

俺も彼女もまだ制服姿だったから、怪しまれないように、まずそれをアピールする。それでも、彼女の瞳は変わらなくて、俺はあせりながらも、中途半端に終えられなくて、結局自己紹介をすることになった。

「俺、一年A組の、佐倉 里実。ちょっと女みたいな名前だけどさ、一応、見たまま男だから……」

何を言ってるんだ、俺。ちよつと笑つたりしながら、そんなことまで口走つた俺を見ても、彼女はにこりともしなかつた。

「桜……？」

その発音が、見事に花のほうの『桜』だとわかつて、俺は笑顔のまま首を振つた。

「いや、佐倉。にんべんに左の佐に、倉敷、とかの倉」

俺の説明に、少し閃きかけた興味みたいなものが、彼女の顔からあつさり消えたのがわかつた。またいつもの、ぼんやりとした表情に戻りかけているのに気づいた俺は、あわてて本を指し示した。

「君も、夢に興味あるの？ 俺もさ、わりと興味あつて えつと、これでも借りようかな、今日は」

ものすごい嘘だ。それでも後に引けずに、俺はその眠くなりそうな本の中から、一冊を選び出した。『夢に出てくる世界』という、中でも一番薄い本だった。

それを見た途端、彼女の顔が輝いたのだ。

「私も それ、読んだことある」

小さく、それでも確かに返された言葉に、俺は驚きつつも、笑つてみせた。少し遠慮がちに、それでも俺の視線を受け止めた彼女は、今までに見たことないほど、明るい瞳をしていた。

その日を境に、信じられないことに、俺と彼女は、休み時間の廊下や、昼休みの裏庭なんかで、時々、話をするようになった。

話といっても、ほとんどが天気のことだったり、挨拶程度で、大した内容ではないし、もちろん、偶然出会った時だけに限られた。それでも段々、常に一人で行動している彼女の、暇な時間帯や、行きそうな場所がわかるようになっていた。

「ねえ、あの本、読んだ？」

その日も、昼休みの、誰もいない裏庭で出会った俺たちの会話は、彼女の質問から始まった。

「ああ、えっと　まだ途中なんだ。バイトが忙しくてさ」

貸出期間である二週間も、残り半分という日に、俺の頼りない返事を聞いて、彼女は少しがっかりしたようだった。

「いや、でもすごく面白いよ」

あわてて付け加えた俺の言葉に、彼女は本当か、というような疑問の目を向けた。

「あのさ、特に　夢と異世界のつながり、なんてところが……」

必死で、ぱらぱら捲っただけの本の内容を思い返して、なんとか言ってみた俺に、彼女は予想以上に嬉しそうな顔をした。

「本当？　私も、その章、何度も読んだんだ！」

長い黒髪が揺れるほどに、手を合わせて答えた彼女を見て、俺はほっとして微笑んだ。俺の笑顔を見ていた彼女は、しばらくして、ぽつりと言ったのだ。

「佐倉くんになら、言ってもいいかな……」

いつものぼんやりした顔や、少しべールがかかったような、遠い目つきではない、彼女本来の顔が、初めて見えた気がした。

既に葉桜になった木々を眺めていた彼女が、ゆっくりと振り返った時、強い風が吹いて、長く艶やかな髪をなびかせた。

「私が、一年休学してたこと、もう知ってるでしょ？」

唐突に言われて、俺は素直に頷いた。既にどこから伝わってきたのかもわからない、噂だったけれど。

「私ね、去年の春、事故にあってから、二ヶ月前に目覚めるまで、ずっと昏睡状態だった。その間、夢を見てたの」

黙って聞いている俺を、ちらりと見て、また自分の中へ意識を戻すように、目を閉じながら、彼女は続けた。

「その夢はね、とてもリアルで、ううん、現実そのものだった。私は、夢の中で、違う世界の、違う『私』として、生きてた。

とても、幸せで……今まで生きてた中で、あんなに幸せだった時間なんてなかった。

私、目が覚めて、泣いたの。目覚めてしまったことを、後悔した。目覚めたくなんてなかった。

あのまま、あの夢の世界で、生きていたかったの」

徐々に熱っぽい口調で、透明な仮面を脱いでいくかのように、話す彼女は、今まで見たこともないほどに、生身の彼女自身だった。

言葉も出ない俺を見て、彼女は一瞬微笑んだ。

「私ね、信じてるんだ。あの夢の世界は、夢なんかじゃなかったって。きつとどこかに、実在しているんだって。

だから、私待ってるの。あっちに帰れる日を」

爽やかにすら、笑ってみせた彼女の姿が、なぜか、遠く、遠く見えた瞬間だった。

チャイムと共に、テスト用紙を置いた俺に、清水が後ろから抱き付いてきた。

「サトミちゃん、俺、もうだめだあ。補習確実かも……」

「抱きつくのも、その呼び方もやめろっての！ 暑苦しい」

不機嫌にはらいのける俺を見て、清水はなにやら含みのある顔を
した。

「何だよ」

「俺にはこんなに冷たいのにさ〜お前、彼女にはえらく熱心じゃん
さっさと回収されるテスト用紙を名残惜しげに見送った後、清水
は小さく呟いた。

「彼女？」

「とぼけんなよ、時田ときた 繭ちゃんまゆに決まってるだろ〜？」

心の中を占めている、その名前に、俺は内心どきりとする。それ
でも素知らぬ顔で、清水を見てやった。

「彼女がどうかしたのか」

「まったまたあ〜、もうすっかり噂だぜ？ お前が、彼女と付き合
ってるって！」

飲もうとしたペットボトルの水を、思わず吹き出しそうになった
俺の反応に、清水は満足げに頷いてみせる。

「やっぱりな。もう、水くさいんだから、サトミちゃんってば！

そういうことなら、そういうことって、言ってくれたらいいのにさ。
俺たち、一応親友だろ？」

気持ちの悪い喋り方に眉をひそめて、俺はなんとか水を飲み込ん
だ。

「何を言ってるんだ、何を。いつの間にそんな噂が出てんだよ？」

「え〜結構前？ だって、あの孤高の美人に唯一話しかけられてる
男って、有名ならしいぜ？ 知らないのは、本人たちだけってね。」

いや〜誰が喋りかけても反応もない、興味も示さないって噂の彼
女に、お前どうやって気に入られたんだよ？ 教えるよ！」

でっかい声でわめきたてる清水のせいで、自然と周りの目線が集
まってきたのがわかる。俺はあわてて、清水を押しつけた。

「そんな噂、でたらめだよ、でたらめ！ ただ、話をしてるってだ
けで、別にそんなんじゃない」

必死でそう言う俺に、離れたところで固まっていた女子の中から、

いつのまにやってきたのか、香織が近づいてきた。

「あれ〜？ 里実くん。顔、赤いよ。やっぱり、本当なんじゃないの〜？ やだあ、クールな里実くんがよかったのに。ああいう子がタイプだったなんて」

「冗談めかして、睨みつけてくる香織に、俺は慚然とした顔を向けた。

「赤くなんかねえよ！ っていうか、ああいう子ってどういう意味だよ」

どちらかというと、否定的な意味に聞こえた言葉を、なんとなく聞き流せずに、俺は訊ねた。途端に、香織は意地悪そうな笑いを浮かべながら、言ったのだ。

「どういうって、そのままの意味よ。みんなが、変人って噂してるじゃない。確かに、顔は綺麗かもしれないけど、お高くとまっちゃってさ、ああいう子は、女子からは嫌われてるんだから」

いつになく嫌そうに言つてのけた香織を、横にいた女友達が遠慮がちに止めている声も聞こえる。

それでも香織は、俺を睨みつけながら、言葉を止めなかった。

「あんな子と一緒にいると、里実くんまで変な人と思われるかもよ？ やめといたほうがいいよ」

その言葉に、苛立ち任せに席を立った俺を、クラスに残った全員が見ていた。

「彼女のこと 何も知らないくせに、勝手なこと言うなよな」

なぜ、こんなに腹が立つのか、わからない。それでも怒りを抑えきれずに低く言い放った俺に、香織は顔色を変えていた。

その場にいづらくなって、俺はそのまま教室を出る。

「おい、学食行かないのかよ〜？」

「今日は、一人で食うからいい」

頼りなく追ってきた清水の声に、俺は振り向かずには答えた。たちまちブーイングする清水も無視して、閉めた教室の扉の向こうからは、冷やかしのような、ざわめきが聞こえてくるのだった。

そのまま向かってしまった先は屋上で、約束も、期待もしていなかったというのに、偶然出会ってしまった相手。それは、先ほどまでの話題の人物だった。

「あれ？ 佐倉くん」

今日はまた、なぜ他に誰もいないのか。小さな弁当箱を広げた彼女は、屋上の柵の前に、一人座っていた。

「あ、ども……」

複雑な俺の心に気づいているのか、いないのか、彼女はいつもの顔で俺を見た。

「あれから、会わなかったから、やっぱり変な子って避けられたかなって思ってた」

何でもないことのように、さらりと言われて、俺は内心の動揺をなんとか表に出さずに笑った。

「そんなことないよ。だって、テスト期間だしさ。俺、結構真面目に勉強するほうだから」

これも嘘ばかりだ。ちょうどやってきた中間テストを言い訳に、なんとかごまかしたつもりで俺を見ながら、彼女は長い髪をかきあげた。

「別にいいんだ。変人扱いは慣れてるし。家族にだって、信じてもらえなかったから……」

弁当の玉子焼きをつつきながら、穏やかな表情で呟く彼女に、俺は申し訳ない思いで無言になった。

だって。彼女の言うとおり、避けていたのは事実だからだ。

といっても、別に変人だとか、そういう理由じゃなくて……俺には入り込めない気がして、なんだか彼女の顔が見られなかったのだ。夢の世界がどうだとしても、それを信じ込んでる彼女の気持ちは、

本当に純粹で、いつか帰る日を待ってる、という彼女の瞳は、この現実　もちろん、目の前にいる俺なんかも捉えちゃいない。それがわかったから、空しくなったのかもしれない。

とにかく、そんな自分の気持ちをもてあまして、避けていた。でも、そのことは口に出してはいけないうような、そんな気がして俺はなんとか彼女を見つめた。

「あのさ……その　夢って、どんな夢だったの？」

なんでこんなことを聞いてしまうんだろう。自分でも入っちゃいけない扉を押してしまうような、怖いものみたさのような、変な気持ちで、俺は聞いた。

途端、彼女は意外そうに瞳を上げて、俺をじっと見つめた。そして、優しい笑顔を浮かべて、話し出したのだ。

「日本じゃない、別の世界　そうね、中世ヨーロッパみたいな国なの。そこで、私は王女だった。何不自由なく育てられた私だったけれど、本当に愛する相手には巡りあえずに、押し付けられる結婚相手に困っていた。そんな時、現れた遠い国の王子と　私は一目で恋に落ちたわ。」

反対や、争いを乗り越えて、私は彼と結ばれるの。でも……ようやく訪れた、婚姻の日　私は、目覚めてしまった」

幸せそうに語っていた彼女の顔は、最後に、とても残念そうに、いや、恨めしそうにすら見えた。

この現実を、本当に憎んでもいるかのような、その瞳に、俺は言葉を失った。

「きつと、彼は今ごろ、私を捜してるわ。それを思うと、辛くて、苦しくて……私、こんなところで、一体何をやってるんだろうって、悲しくなる」

何だよ、それ　喉まで出かかった言葉を、俺は必死で飲み込んだ。

夢の世界、結構だよ。幸せな夢を見る権利ぐらい、誰にでもある。でも、目覚めた現実を恨むなんて　夢ばかりを懐かしみながら、

抜け殻みたいに生きてるなんて、そんなの……おかしいじゃないか。怒りに似た感情が、胸に渦巻く。そんな自分を必死で抑えつけている俺には、全く気づかないように、彼女は笑った。

「また、変な子って思われるね。いいんだ　気にしないで」
出会った当初より、だいぶ人間らしくなった彼女の笑顔に、俺は何も答えることができなかった。

そうして、また弁当を少しずつ口にしまった彼女の隣で、複雑な思いで、俺は購買のパンにかじりつくのだった。

彼女にもっと近づくべきなのか、それとも、これ以上深入りしないほうがいいのか。決めることもできずにいるまま、中間テストは終わり、体育祭の準備が始まった。俺の手元には　返却期間を過ぎた、一冊の本。『夢に出てくる世界』というタイトルが示すとおり、夢の世界について講釈しているものだ。

すっかり混乱した俺は、いつしかその本を読み始めていた。第一章からは、普通の、現実で体験したことをそのまま夢に見るという内容や、簡単な夢判断、願望や期待、または不安などが現れる夢について書かれている。

そして第二章には、心理的な要因、潜在意識などについても触れていて、問題の第三章では、夢と異世界のつながりが書かれていた。前世や未来を夢に見る、という不思議な力を持った人々についてや、夢に毎日同じ世界　異世界のようなものを見る人の話など、とにかく彼女の興味を持ちそうな内容だった。

それでも、実際に夢の世界を異世界であると断言してるわけでもないし、ましてや、実在する世界だなんて、言ってもいない。

彼女の語った内容を思い出しても、俺にとっては、ただのロマンチックな空想や、自分にとって、都合のいい幻想程度にしか思えない。

かった。

こんなことを彼女に言ったら傷つくだろうけど　俺は、彼女の話を通じてもいなかった。

いや、実際そんな夢は見たんだろう。だからといって、その世界が実在して、王子とやらが、自分を待っているだなんて、そんなのは、あきらかに行き過ぎた妄想もいいところじゃないか。大体、異世界なんて、物語や空想世界だけの話で、そんなものがあるはずもない。

けれど、そんなことを、純粹に信じ込む彼女に、どうやって理解させればいいのか。それとも理解させる必要があるのかすら、わからなくなっていた。

友達を作ったり、現実世界を楽しんだり、そういうことがまだできないにしても、一応彼女は普通に生活して、学校にも来ている。

そうだ、本当に現実に興味もないなら、学校にだって来ないんじゃないのか。それだけでも、まだ希望はある。

このまま、ゆっくりと、空想から覚めて、大人になって、みんなと交わっていければ、それでいいのかもしれない。

何せ、一年も休学していたのだから　そんな彼女の話を聞いてやる人物が、一人ぐらいいてやつてもいいじゃないか。

俺の結論は、結局そんなところに行き着いた。

彼女の前では、勿論見せもしない結論で　時々会って、夢の話を書いてやる日々が続いていただけけれど。

いつの間にか、勝手に公認のカップルみたいに思われていたみたいだったが、もうそれすらも、俺にはどうでもよくなっていった。

だって、どうせ、俺の存在なんて、彼女には見えてもいないのだから。

そして、やってきた体育祭当日。そんな俺と彼女に、意外な出来事が訪れるなんて、晴れた朝には、知る由もなかった。

一年A組 飛翔、と書かれた皆で作った旗を振るのは、清水。お調子者で、軽い奴ではあるが、なんだかんだ言っただけ、こういう人氣の役を得る奴なのだ。

学ランをはおって、旗を振りながら応援する清水の隣には、香織。いつの間にかやら、俺よりも清水と楽しげに会話するようになっていた彼女をちらりと見て、俺はなんとなくほっとした気分だった。清水の気持ちは、何となくわかっていたからだ。

隣のB組を見た、俺の視線は、やっぱり長い黒髪へと向かう。一応、行事にも参加しているんだな、と安心する。

相変わらず一人で座ってはいるが、それでも前ほど変人扱いではないようだった。

「おい、次、お前の番だぞ」

クラスメイトに肩を叩かれて、俺はあわてて立ち上がる。そう、次は借り物レース。

この、なんともふざけた競技に俺はくじ引きで選ばれ、参加することになっていた。しかも、この借り物レース、学内の名物競技というか、カップルが生まれる伝統となっているのだとか、何とか。まあ、俺には関係ないことだけれど。

渋谷集合の場所へ向かった俺に、クラスメイトが声援を送る。その目つきが、どこか嬉しそうなおものであることも、その時には気づかなかった。

「次は、借り物レース、全学年の選抜男子による、競技です。なお、この競技に参加する男子は、女子による投票で選ばれた、人気ランキングに見事輝いたメンバー限定となっております。女子の皆さん、どうぞ、お楽しみください」

放送委員の女による、ふざけた声に、俺は思わず目を剥いていた。そんなことは、一切聞いてもいなかったし、純粹なくじ引きで選ばれたとばかり思っていたからだ。

黄色い声援が飛んでくる中、俺は思わず顔を赤くしていた。

くっそ〜、あいつら……俺を見世物にしゃがって。クラスメイトに目を向けると、みんながピースサインを見せてきた。

そして、いよいよ競技が始まり、俺の出番がやってきた。

目の前に並んだ紙から、適当に選んで開いた俺の目は、大きく見開かれた。よりにもよって、その紙には、太いサインペンで『好きな女の子』と書いてあったのだ。しかもご丁寧に、ハートマークつきで。周りを見回した俺は、皆が同じような、困った顔をしているのに気づいた。

『彼女』やら『憧れの女性』やら、『告白したい女の子』やら、そんな文字ばかりが見える。中には、そんな競技だと知っていたのか、彼女でもいるのか、堂々と女子の群れへ向かっていく奴もいる。あきらめたように、それぞれに相手のもとへ向かう男子の中で、俺は一人固まっていた。

好きな女って、好きな女って……どうしたらいいんだよ？

自然と目で追った先には、ぼんやりとした顔で座っている、黒髪の彼女。

その手を引くことが、どういうことなのかはわかる。こんな公衆の面前で、俺にどうしろというんだ。

すっかり混乱に陥っていた俺に、放送委員がご丁寧に近づいてくる。

「どうしましたかあ？ 照れてたら、負けちゃいますよ！ さあさあ、あきらめて、好きな彼女の元へ走ってください！ あ、いないんだったら、私でもいいですよ？」

にやにやと言ってくる放送委員を、俺はぎらりと睨みつけた。そして、A組の面々を見ると、清水の奴が、旗を振りながら俺を見た。「どうした？ 負けたら、クラス全員におごりだぞ？」

いたずらっぽくウインクまでされて、俺はぶち切れた。もう、いい！ 何がどうなっても知らん！

そして走り出した俺は、B組のほうへ向かう。女子が騒いでいる

中、俺はあきらめの境地で、端に座っている彼女に手を差し出した。
「繭まゆ！ 一緒に来い！」
初めて名前を呼んだことすら、俺は気づいていなかった。そんな俺の声に、大きく目を見開いて、顔を上げた彼女。

ためらっているのか、何が起こっているのかわかっていないのか、固まったままの彼女の手首を、俺は苛立たしげに掴んだ。

そして、無理に連れて走り出した俺に、彼女は驚きながらも、付いてきた。

皆が歓声を上げる中、俺たちは必死で走った。

驚いたのは、彼女が意外と足が速かったこと。長い黒髪をなびかせて、無心のように走って付いて来る彼女の手を、いつしか握っていた。

しっかりと手をつないで、ゴールインした俺たちは、何と一位でなんともおおせつかい極まりない、ラブラブカップル賞というもので、いただいてしまった。

そんな事態に、彼女が少しだけ、頬を染めていたように見えたのは、俺の気のせいだったのか、どうなのか。

意外な接近に驚いた体育祭は、あつという間に終わりを告げていた。

そんな賞が、俺たちの関係を変えることは、別になかった。あいもかわらず、約束もせず、俺たちは時々会って、話をするだけ。唯一変わったのは、彼女が笑顔を見せる回数が、少し増えたことぐらいだった。

けれど、そんな日々も、梅雨に入って、変化を見せた。確かに鬱陶しい雨ばかりで、誰でも気分が暗くなる。それは、彼女にとっても例外ではないようだった。

「雨の日ってね　なんだか眠くなるの」

その日も降り出した雨のせいで、裏庭から、場所を渡り廊下に移した時、彼女の唐突な話がまた始まった。

「眠りに落ちると、またあの世界へ行けるんじゃないかって……そう思うんだけど、あれ以来、全然夢は見れないの。」

どうしてだろう。あの人は　私を待っているんじゃないのかな　いつもながら、そんなことを言われても、どう答えたらいいのか、俺にはわからなかった。

そんなことないよ、とか言ってみるほど優しくもないし、冷たい言葉を吐けば、彼女は悲しむ。変な葛藤の狭間で、俺は曖昧に微笑んだ。

「本当に、その人が好きなんだね」

それでも出てきてしまった、皮肉めいた言葉を、彼女は言葉通りにとったようだった。

「うん　私、あんなに人を好きになったこと、なかった。彼も私をすごく愛してくれたし……幸せ、ってこんなことなんだってそう思ってたのに」

窓枠にもたれて、降りしきる細い雨を、ぼんやりと見つめる彼女の横顔を、俺はなんともいえない気持ちで見ている。

ただの、夢だろう。そんな奴　實在なんて、してないんだよ。そう言ってみたくなくて、その純粋な想いをぐしゃぐしゃに塗りつぶしてやりたくなくて、俺はなんとか息を吐いた。

「どうしたの、佐倉くん」

珍しく俺の様子を気遣うような彼女の言葉、それにすら苛立ってしまったって、俺は自分の前髪を、乱暴にかきあげた。

「何でもないよ。そろそろ、授業始まるから、行くわ」

「あ、うん」

最近、こうして俺から会話を切り上げてしまうことも増えた。そうしないと、自分が何を言うかわからなかったのだ。

それなのに、毎日彼女と話してしまう。また、苛立ってしまう。

同じことの繰り返しで、俺自身も耐えられなくなっていた。
そんな俺の態度をどう思ったのか、彼女も段々と言葉を止めるこ
とも多くなっていた。

「え、休み？」

最近顔を見ないと、覗いたB組の教室で、わざわざ女子が教えて
くれたのは、ここ数日、彼女は休んでいるという情報だった。

「ねえ、お見舞い行くんだったら、住所教えてあげるよ」

親切から言っているのか、ただの好奇心なのか、そう言われて、
俺は思わず断っていた。

家にまで押しかけるほど、彼女と親しいと言えるのか、そんなこ
とを考えると、聞けなかったのだ。

ところが、その日の放課後 思わぬ相手から、同じ申し出を受
けることになる。

「ねえ、佐倉 里実ってあんた？」

校門のところで声をかけられて、俺は辺りを見回した。傘の隙間
から、それらしき人物が見えなかったからだ。

そんな俺に、その声は、苛々したようにまた言った。

「おい、どこ見てんだよ！ ここだよ、ここ！」

ようやく見つけたのは、中学生らしき、少年。まだ低い背を気に
するかのように、精一杯背筋を伸ばして、俺を見ていた。

「……そうだけど？」

なんで、こんな坊主が俺を知っているんだろう。そんな俺の目を、
少年は睨むように見上げた。

「俺は、時田 智^{ちこる}。姉ちゃんから、あんたのこと、聞いてるよ」

時田 ？ その名前に、目を見開いた俺に、時田 智 繭の
弟だと名乗った少年は、満足げににやりと笑った。

しばらく無言で歩いていった智は、バス停まで来ると、看板の文字

を指差しながら言った。

「ここから、そんなに遠くないんだ、家。姉ちゃん、近いからって理由で高校選んだからさ」

それは、一緒に行けと言うことなのだろうか。ちようどやってきたバスに、連れられるまま乗り込んだ俺は、なんとも複雑な気分で智の隣に座った。

「あのさ、お姉さん、俺のこと何て言ってたの？」

気になっていたことを、なんとか訊ねた俺に、智は中学生らしくない、意味深な顔で笑った。

「知りたい？」

中学生にからかわれてやる義理はないと、あわてて興味のない顔をした俺に、智はにやにやと笑いながら、答えた。

「別に、ただ、最近ちよつと話したって聞いただけなんだ。名前も教えてくれなかったけど、さつき校門で何人かの人に聞いたら、すぐにあんたの名前、教えてくれたからさ。やっぱり、姉ちゃんといると、目立つだろうしね」

ちよつと淋しそうなその顔に、俺はなんとなく黙った。やはり、家族にとつても、彼女は心配の種なのだろうとは容易に想像できたから。

「姉ちゃんがああなつてから、ちゃんと話をした人つて、あんたが初めてなんだ。だから　なんとか、助けになってやってほしいんだよ。」

じゃないと……また姉ちゃん、眠ったままになつちやうかも。嫌なんだよ、もう　あんな姿見るの、だから、どうしても、一緒に来てほしかったんだ」

そんな話をすると、智の顔は年相応になった。そして、弟として姉を心配する顔に。

「眠ったままつて、どういう　もしかして、彼女に何かあったのか？」

あわてて智の肩を掴んだ俺に、智は一瞬驚いて、そして首を振っ

た。

「いや、風邪で寝込んでるだけ。でも……薬飲んで、長く寝たりしてるのを見ると、やっぱり不安で」

その答えに、一応ほっとして、俺は智の肩を放した。

それでも何かの不安が、俺の中に巣食い始めるような、そんな気がしていた。

辿り着いた家は、大きな和風のお屋敷だった。驚く俺と智を、母親が出迎えた。

「よろしかったら お茶、どうぞ」

通されたのは客間で、湯気の上る日本茶を出された俺は、かしこまって受け取った。

「ごめんなさいね、せつかく来ていただいたのに……あの子、さっき眠ってしまったばかりで」

恐縮したような母親に、俺はとんでもないと首を振った。

一緒に出されたお茶菓子の上品な味と、あまりに立派な和室の様子に、どうにも落ち着かないでいる俺を見て、母親は微笑んだ。

「いいんですよ、足も崩していただいて
正座していた俺は、その言葉に甘えて、胡坐をかかせてもらうことにした。」

開けられた障子の隙間からは、雨の上がった、美しい日本庭園が見える。こんな立派な家で、彼女は育ったのか。

物思いに更ける俺の前で、母親は同じように、庭を眺めながら、ため息をついた。

「昔は 明るくて、よく笑う子だったんですよ。それが、今ではすっかり、変わってしまった……」

言わずとも、それが繭のことであるのがわかった。黙って聞いている俺に、少し笑って、母親は俯いた。

「私たちのせいなんです。私たちが、あの子を、あんな風に変えてしまったんです」

悲しげにそう呟いた母親は、まるで懺悔でもするかのように、話し出した。

「あの子はね、子供が望めないと言われた私たち夫婦が、養子にもらった子なんです」

思いもかけない言葉に、俺は驚いたまま、言葉が出せずにいた。それでも、独り言のように、母親は話し続ける。

「もちろん、大切に大切に、愛情を込めて育てたつもりだったけれど、その三年後、奇跡のように、私たちは子供を授かったんです。」

それが、智 二人の間に、何も差をつけたつもりはなかった。それでもやはり、繭のことは、どこかに気を遣って扱ってしまったのかもしれない……。

敏感に察していたあの子は、ついに、去年、戸籍を見て、本当のことを知ってしまった。

それで、家を飛び出して 事故にあったの。そのことを知った智は、自分のせいだと、自分を責めて…… 私たち夫婦は、自分たちを責めて、彼女が目覚めるまで、この家は暗く、沈みこんだ毎日をおすごしました。それが、繭が目覚めた 喜んだのはつかの間、あの子は夢の世界へ帰りたいたいと言う……。

愛情は、ある。大切に、接しているつもりです。それでも、あの子の心は閉ざされたままで もう、どうしたらいいのか……」

ついに耐え切れないように、両手で顔を覆った母親に、俺はどう声をかけたらいいのか、わからなかった。

どこかで聞いていたのか、そこに飛び込んできたのは、智だったのだ。

「母さんのせいじゃないよ、誰のせいでも……姉ちゃんが、自分で本当に目覚めたいと願わなきゃ、どうしようもないんだ！」

夢の世界へ行きたいなんて、思わないように、自分で現実に帰っ

てごなきや、どうしようもないんだよ」

そう叫んだ智は、子供ではなく、苦悩を秘めた、強い顔をしていた。彼女を支える、家族たちの辛さが、痛いほどに伝わってくるようだった。

黙っていた俺の肩を、智が掴む。そして、潤んだ瞳で、俺を見上げた。

「お願いだよ、どうか　姉ちゃんを取り戻して！　初めて興味を示した、あんたなら、姉ちゃんを救えるかもしれない。

頼むから……夢に姉ちゃんを取られてしまわないように、助けて
！」

必死の叫びは、俺の胸に、突き刺さって、深く入り込んでいった。

数日後、学校へ顔を出した彼女を見かけて、ほっとしたのもつかの間、通りすがりに視線があっても、たまに気づかないで行ってしまふようにさえ、なっていた。

以前より、ぼんやりした顔をしていることが多くなって、俺は彼女の家での会話を、自然と思いつかべずにはいられなかった。

夢に、彼女を取られる、そう言っていた智の声。心が閉ざされたままなのだ、そう言っていた母親の言葉。

全てが頭に浮かんで、段々と形のない不安を呼び寄せていく。

その日も、思わず腕を掴んだのは、その不安のせいだったのかもしれない。

「おい！」

目が合っても、ぼんやりと遠くを見たまま逸らされた視線に、我慢ができずに、俺は彼女の腕を掴んでいた。

驚いたように振り返って、瞬きをした彼女が、ようやく俺のこと

に気づいたのがわかった。

「ああ 佐倉くん。久しぶりだね」

そう言いながらも、遠くを見ているような彼女の瞳。それが何を
見ているのか、俺は嫌な不安を押しやりながら、笑った。

「風邪はもういいの？」

俺の言葉で、ようやく思い出したように、彼女は頷いた。

「うん。あ、そういえば、佐倉くん、お見舞いに来てくれたんだっ
て？ 私、寝てたから……」

「いいよ、別に。元気だったならそれで」

ようやく交わせた普通の会話に、俺は少しほっとしていた。そんな
俺を、彼女もどこか機嫌がよさそうな顔で見っていた。

「そうだ あかね、いいニュースがあるの」

笑顔で言った彼女に、俺も自然と笑顔になる。その笑顔が、思わ
ず固まるような返答が、返ってきた。

「風邪で寝ていた間にね、また、彼の夢を見たの！ やっぱり、待
ってくれたのよ。私にね、早く帰っておいでって！」

世にも嬉しそうなその言葉に、俺は凍りつくような気がした。

「帰っておいでって、どうやって？」

無表情で訊ねた俺の様子には、全く気づかないように、彼女は笑
った。

「そうね。私もそれを、今考えてるところ。佐倉くんも、いい案が
あつたら、教えてね」

冗談なのかと思えるほどに、明るい口調で言って、彼女は手を振
った。

その背中を追いかけようとした俺の耳に、鳴り響いたチャイムの
音。授業開始の知らせに、俺は仕方なく教室へ戻った。

なびいた長い黒髪と、彼女の笑顔が、胸に残って、今度こそ、大
きな不安へと育っていく、そんな恐ろしい予感がしていた。

衝撃は、その日の放課後にやってきた。

昼休みに、一応見かけた彼女の姿で安心していただけの俺は、バイトに向かうために、校門へと急いでいた。

担任に用事で呼び出されたりして、すっかりクラブも始まったこの時間帯　校庭には、忙しくあふれる生徒たちがいて、その時、誰ともなく、叫んだ声が聞こえたのだ。

「ちよつと、見て　あれ！」

同時に目をやった先で、女生徒たちが悲鳴を上げているのが見える。彼女たちの視線が集まるのは、屋上。

次々と混乱した声がかかる中、俺は目を見開いていた。

屋上の柵を乗り越えて、今にも落ちそうなほど、ぎりぎりのところに立っているのは、長い黒髪の少女だったのだ。

ここからでは、誰か判別できるほど、顔も見えない。それでも、何か奇妙な確信が、俺を屋上へと走らせた。

あせりにもどかしい足を繰り返して、必死で辿り着いた屋上の扉を開け放った俺は、予想通りの光景に、息を呑んでいた。

見慣れた長い髪、細い背中、そう、まぎれもない、彼女のもの。

「繭！」

叫んだ俺に、振り向いた彼女は、一瞬だけ瞳をさまよわせて、俺をゆっくりと捉えた。

「佐倉くん」

笑顔すら浮かべてみせた彼女に、俺はなぜか足が固まって、動けなかった。

「な、何やってんだよ！」

俺の怒声に、驚いたように、目をぱちくりさせて、彼女は笑った。

「何って　思いついたの。彼のところへ、行く方法よ」

「何、だって……？」

嫌な汗が流れて、俺はかすれた声で訊ねた。俺とはうってかわって、清々しいほどの表情で、彼女は笑っている。

「どうして、今まで思いつかなかったのかしら。おかしいわよね、こんなことに気づかなかったなんて。」

こんな重い体　捨ててしまえばよかったのよ。そうすれば、楽に彼の世界へ行ける。夢の　ううん、私にとっての本当の世界に。佐倉くんも、喜んでくれるでしょう?」

笑っているはずなのに、不自然なほど、人間らしくない、まるで人形のような彼女の顔を、俺は無言で眺めていた。

今にも落ちてしまいそうな場所で、恐ろしさなど全く感じていないかのような平然とした様子で、まっすぐに立っている彼女。

その彼女が、誰か見知らぬ人物にすら見えた。

「だめだ……今すぐ、こっちに来るんだ!」

ようやく出た自分の声と一緒に、俺は彼女のいる、柵のほうへと駆け寄った。

その言葉に、眉をひそめて、彼女は首を振った。

「どうして　?　佐倉くんも、みんなと一緒になの?　あなたなら、理解してくれると思うってたのに。」

私の幸せを、応援してくれないの?」

失望を瞳に垣間見せて、彼女は息を吐いた。それでもなぜか、その瞳はいつもより、確実に強い輝きを放っていた。

幸せ、だと　?　俺は、思わず拳を握り締めていた。その手が、見てもわかるほどに震えている。いや、全身が震えているのがわかる。

「冗談、じゃない……」

噛み締めた唇からもれた俺の言葉を、聞き取れなかったように、彼女は首をかしげた。

「夢が君の幸せだった?　いいかげんにしろよ!　じゃあ、この現実は何なんだよ!　この世界で、君を心配している両親も、弟も、どうだっていいって言うのか?」

怒りをそのまま込めて叫んだ俺に、彼女は一瞬だけ動揺を見せて、瞳をそらした。

「あの人たちは……本当の、家族じゃないもの。私を心配しているなんて、言葉だけよ。本当は、迷惑してるの。私がいなくなっただけが、皆せいせいすると思ってるのよ！」

負けじと叫ばれた彼女の声には、今まで彼女が秘めていたのだろう、悲しみや孤独がつまっているようだった。

それでも、あの日目にした、彼女の家族の嘆きを、俺は忘れられなかったのだ。

「現実が、辛いなんて、皆一緒なんだよ！ 誰もが、逃げたいような苦しみと戦ったり、悲しみに泣いたりしながら、それでも生きてるんだ……幸せばかりの世界なんて、夢でしかない！」

所詮君は、現実から、目をそむけて、逃げてるだけなんだよ！」「俺の言葉に、彼女は両手で耳を塞いで、首を振った。

「違う、違う、違う！ 私は逃げてるんじゃない……あの世界は、実在するの！ 彼は……ちゃんと生きてるの！ 私だって、あつちの世界で、生きるの。」

愛した人と、共に生きたいだけ　その何が悪いって言うの？
まるでいやいやをする子供のように、必死で言い放った彼女は、更に端へと足を進めた。

「繭！」

叫んで、柵を掴んだ俺を彼女は睨みつけた。

「その名前で呼ばないで！ 私は繭じゃない……私には、別の名前が、別の人生があるんだから！」

涙と共に、信じきった表情でそう言う彼女が、俺にはどうしようもなく、悲しげに見えた。幸せに生きると、そう言っているはずの彼女が　なぜか、助けを求めているようにさえ、見えたのだ。

俺は、ゆつくりと柵を乗り越えて、彼女の隣に並んだ。後ずさる彼女のぎりぎり近くまで寄って、その瞳を捉える。

狼狽したような、彼女のほうへ、俺はそっと手を差し伸べた。

「繭……」

「その名前で呼ばないでったら！ 私は」

言いつのる彼女を気にせず、俺は更に手を差し伸べた。

「君は、繭だ。時田 繭。人付き合いが苦手で、自分の世界に閉じこもりがちで、それでも、人を切り離せないでいる、高校生。」

俺の前では、君はそんな女の子でしかないよ。どこかの国の王女でも、王子と恋に落ちた女の子でもない。

それでも俺にとっては、ただ一人の、特別な女の子だ」

考えるよりも先に、言葉が出た。どうしてこんなことができているのか、落ちそうに狭い柵の外で、危険極まりない場所で、それでも俺は微笑んでいた。

「おいで 繭」

そう言った俺に、繭は大きく開いた瞳から、涙を流しながら、首を振った。

「いや……私がいなくなっても、この世界は変わらない。私なんて、いてもいなくても同じなんだから……」

呟いた彼女の隣で、俺は思わず柵に拳を打ち付けていた。

「違う！ 君の周りの世界が、皆が、悪いんじゃない！ 君が、見ようとしていないだけなんだ！ 君の母親は、自分を責めて泣いていた。弟は、俺に君を救ってくれて、必死で言ってた。」

そうやって、君を愛する人たちを、君が自分で締め出しているだけなんだよ！ 目をそむけていないで、しっかりと目を覚まして、見てみるよ！

この現実には、君にとって、本当に価値がないものなのか？」

わきあがる怒りと、悲しみと、苛立ちと、全てがごちゃ混ぜになつて、叫びになった。

とんでもなく格好悪いことをしているような気もしたけれど、それでも言わずにはいられなかったんだ。

長い黒髪が風になびく。彼女は、俺の言葉に悲愴なほどの顔をしながら、柵の内側と、外側の光景を見比べていた。

迷っているように見えた彼女の体に、強い風が突如吹き付けた。そして、目を細めた彼女は、その風が渦巻く方向を遠く見つめて、はっとしたように、目を見開いたのだ。

「彼だわ やっぱり、私を呼んでる……！ 私、行かなきゃ」
彼女が手を伸ばした先に、一瞬だけ暗く広い空間のようなものが見えた気がして、俺は思わず目をこすった。

そうする間にも、俺の目の前で、彼女は今にも飛び降りそうに、両手をいっぱい伸ばした。

ますます強くなる風の中、俺は空気の違う、不思議な空間の広がりを目にしたのだ。そして、そこから、こちらに向かつて、手を差し伸べている人物 男の顔が、確かに見えた。

その男へといっぱいに手を伸ばした彼女を、俺は必死で抱きとめた。

「離して……！ 彼のもとに行かせて！」

叫んだ彼女の腕を、力いっぱい引いて、俺はその男から、彼女の体を取り戻すように抱きしめた。

腕の中におさまっても、まだ抵抗しようとする彼女を抑えて、俺は叫んだ。

「君が好きだ！」

無意識に近いほどに、滑りてた俺の言葉 それでも、心の中から、絞り出されたような悲鳴に似た声に、彼女は目を見開いて、俺を見た。

確かに俺へと向けられた視線を、自分に固定するかのようになぎとめて、俺はもう一度叫んでいた。

「だから、行くな！ 俺と一緒に この世界で、生きてくれ！」
俺が叫んだ途端、吹き荒れていた風が、嘘のように止んだ。

ゆっくりと、夢から覚めていくように、彼女の瞳が、俺を映していく。その様子は、まるで薄いベールが剥がれ落ちていくようでもあり、透明な、彼女を守っていた殻が、壊れていくようでもあった。時が止まったかのような一瞬は過ぎて、彼女は、堰を切ったように

泣き出した。

後から、後からあふれてくる涙は、今まで溜め込んでいた何かを、洗い流すように、いつまでも止まらなかつた。

俺は、そんな彼女をそつと抱きしめていた。彼女が泣き止むまで、そして、彼女もいつしか、しっかりと、そんな俺の腕を、掴んでくれていたのだった。

そして気づいた頃には、静かな屋上に戻っていて、俺たちは、いつの間にもやら集まっていた先生や野次馬に囲まれて、とんでもなく恥ずかしい思いをすることになったのだ。

どうやら、下では大騒ぎだったらしく、あともう少しで、消防隊やら、警察を呼ぶところだったとか。

注意深く、柵を乗り越えた俺たちは、延々続く、鬼のような先生の説教を一緒にくらった。

ようやく帰る、夕空の下、俺たちの手は、しっかりと繋がれていたことが、せめてもの救いだった。

しばらくは、まるで芸能人なみに噂にさらされていた俺たちは、いまやすっかり校内公認のカップルになった。今度こそ、本物の彼女のほうはといえ、少しずつではあるが、他の女生徒とも言葉交わしはじめているらしい。

それはいい傾向で、俺もほっと一安心なのだが、それでも、時折思い出す。

あの時の、不思議な空間の中の、あの男を。屋上にいた誰しも、そんなものは見ていないと言った。

だから、俺の幻覚だったのだろう。そう思うものの、まさか本当に、あれが彼女の言う、夢の世界だったのかもしれないとさえ、

思うことがあるのだ。

彼女は、あの屋上でのことは、話もしなかった。段々明るくなる彼女の笑顔に、俺も蒸し返したくもない。

それでも 時々不安になる。もしも、再び、彼女が夢に囚われてしまったら。眠りに落ちたまま、目覚めなかったら と。

そんな不安を、隣を歩く彼女には見せないように、微笑んだ。

「期末テストが終わったら、海にでも行こうか」

俺の言葉に、彼女はその瞳を輝かせる。

「本当？ じゃあ、楽しみにしてるね！」

「よし、じゃあいいとこ連れて行けるように、バイト頑張らなきゃな！」

張り切って答えた俺に、極上の笑みを返した彼女は、もう、夢に囚われていた頃とは違う。

眠り、という糸で自分を守り 孤独な世界で夢に閉じこもっていた、繭の中の少女ではないのだ。

新しい希望を目にした、生きた彼女の微笑みを、俺は満足げに見つめた。

夏は、すぐそこまで来ている。

(後書き)

このお話の原案は、ずっと前から温めていたものでした。当初は、悲しい結末にする予定だったのですが、やはり考え直して、ハッピーエンドで書きました。

夢の世界と現実が曖昧にゆらぐ時、当たり前の日常に疑問を持つ瞬間、そして異世界というものが、どこにでも存在しうるものなのか、もしない、という可能性、そんなものが書いてみたくて、考えたお話です。

お話は、佐倉くんの目線、現実側からになっていますが、きっと彼女の目線から書けば、また違う物語になったことだと思います。

果たして、彼女が見たものは、本当に夢だったのか、それとも異世界だったのか。皆様はどう思われますか？

ちなみに、ジャンルは「ファンタジー」「恋愛」どちらかにしようかとも考えたのですが、ファンタジー要素は足りないうというのと、恋愛をメインに書きたかったのではないので、結局「その他」にさせていただきました。

うまく表現できたかわかりませんが、このお話で、少しでも何かを感じていただければ、幸いです。

感想、コメント等、何でもお待ちしております！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2413e/>

繭姫 マユヒメ

2010年10月8日15時53分発行